㉞ 人身御供の話

「むかしナアあるところに情深い庄屋様があったとよハァー」

「おばんちゃ　庄屋様ってなんだア」

「庄屋様つうのはこの辺のおやかっつぁまのことだべえ」

「うん　それから」

「ある時その庄屋様が夢を見だとサア　なんでもハアおっかねえ面つきで白い頭の毛はぼうぼうとして前さ下り金壺まなぐで白い着物を着て枕もとに突っ立って『こらやい、おめえの家のぐしに白羽の矢が立ったぞ。おめえは娘が八人もいるが十八になるずうと一人ずつ人身御供に上げんだぞ　俺はこの鎮守様のお使いだ』」

「人身御供ってなんだ」